

「太閤殿下の夢 ～秀吉の朝鮮出兵の真意とは」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

【※このレジュメは、講演当時（平成 22 年 2 月）から大幅に改変していますが、天下統一に向けての秀吉のエピソードを加筆するなど、より充実した分かりやすい内容となっております。どうぞお楽しみください】

1. 「天下人」秀吉のサクセス・ストーリー

皆さんは、豊臣秀吉(とよとみひでよし)という名前を聞いた際に、まず何を思い浮かべますか。

普通の日本人ならば「天下統一を成し遂げた偉い人」「低い身分から関白にまで出世した凄い人」あるいは「大坂城(現在の大阪城)を築いた人」など、良い評価をされることが多いと思います。

特に、大阪において秀吉は「豊国大明神(ほうこくだいみょうじん)」として神様の扱いを受けており、また関白の経験者という意味の「太閤(たいこう)さん」とも呼ばれ、高い人気を誇ってきましたが、最近はずいぶんそういう流れにはなっていないようですね。その理由として挙げられるのが、秀吉が晩年に行った朝鮮半島への出兵です。

秀吉が国内において天下統一を成しとげた英雄であることはいうまでもないですが、その一方で、海の向こうの朝鮮半島では「冷酷無比な侵略者」として、現在でも悪魔のように嫌われているのです。

一人の歴史上の人物に対して、国内外でどうしてこれだけの認識の違いが生じるのでしょうか。これらの謎を探るためにも、まずは豊臣秀吉の人生を、その生い立ちから振り返ってみたいと思います。

豊臣秀吉は、1537 年に尾張中村(現在の名古屋市中村区)で生まれたとされていますが、若い頃に実家を飛び出すと、やがて木下藤吉郎(きのしたとうきちろう)と名乗って、織田信長(おだのぶなが)の配下となりました。

始めは信長の小者(こもの、使い走りや雑用係のこと)として仕えていましたが、草履取(ぞうりとり)として、冬の極寒の最中に信長の草履を自らの懐(ふところ)の中に入れて温めていたというエピソードで知られる、彼の「人たらし」たる魅力が、信長の目に留まりました。

やがて彼は、美濃(現在の岐阜県)の墨俣(すのまた)において誰もが失敗していた築城を、現地の土豪の

協力を得て短期間で完成させたといったような、非凡な才能による迅速な仕事ぶりが信長の歡心を買ったことで、常識破りの出世街道を歩んでいきました。

ところで、秀吉の出自については実は諸説ありまして、例えば父親が百姓か、あるいは足輕であったとか定かではありません。いずれにせよ、秀吉が根っからの戦国武士でなかった可能性が高く、逆にそのことが秀吉の出世を助けることになりました。

秀吉は、先述した墨俣築城において現地の土豪に協力を仰いだことや、三木城(みきじょう、現在の兵庫県)や鳥取城の攻略において、現地の商人から兵糧をすべて買い取って兵糧攻めにしたり、高松城(たかまつじょう、現在の岡山県)の攻略では、現地が低湿地帯であることを見抜いて城の周りを水没させる水攻めにしたりするなど、通常の武士では考えもつかない策を次々と実行していきました。

これらの献策が能力主義を第一とする信長から高く評価され、1582年の毛利家(もうりけ)の攻略(=先述した高松城攻め)の頃には羽柴秀吉(はしばひでよし)と名乗り、姫路城主(ひめじょうしゅ)として立派な大名となっていました。

しかし、その毛利攻めの総仕上げとして信長を現地まで招いたことが仇(あだ)となり、旧暦6月1日の深夜に、信長が明智光秀(あけちみつひで)によって本能寺で殺されるという凶事が発生してしまいました。

信長の死を知った秀吉は愕然(がくぜん)としましたが、ピンチはチャンスでもありました。信長の敵(かたき)である光秀を他の家臣よりもいち早く討つことで信長亡き後の自分の地位を高め、あわよくば天下をわが手にしようと決意したのです。

秀吉は毛利家が信長の死を知る前に和睦(わぼく)すると、京都まで常識破りの速さで軍を引き返しました。世に言う「中国大返し」です。そして6月13日には京都の山崎で光秀と戦って勝利しました。これを山崎の合戦といいます。

敗れた光秀は、逃げる途中で落武者狩りの手にかかって死亡しました。ちなみに、山崎の合戦で天王山(てんのうざん)を先に支配した秀吉側が勝ったというエピソードから、物事の正念場を「天下分け目の天王山」と表現するようになり、また光秀のあまりにも短かった天下の期間から「三日天下」という言葉が生まれました。

その後、当時幼少であった信長の孫の三法師(さんぼうし)を信長の後継者としたうえで、自らはその後見人となった秀吉は、織田家の家臣同士で敵対関係にあった柴田勝家(しばたかついえ)を1583年に賤ヶ岳(しずがたけ)の戦いで滅ぼし、信長のつくり上げた権力と体制の事実上の継承者としての地位を確立しました。

1583年、秀吉は信長が築城した安土城(あづちじょう)を手本として、水陸交通の要所であった大坂の石山本願寺の跡地に大坂城の築城を開始し、天下統一への自らの意思を天下に示しました。

1584年、秀吉は信長の同盟者であった徳川家康(とくがわいえやす)や、信長の二男である織田信雄(おだのぶかつ)と小牧(こまき)・長久手(ながくて)の戦いに挑みましたが、敗れてしまいました。しかし、その後秀吉は信雄と和睦に成功し、戦いの目的を失った家康とも和睦しました。

やがて秀吉は家康に自身への臣従を求め、自分の妹を家康の新たな正室として差し出したり、母を人質として送ったりしました。こうした秀吉の容赦ない攻勢に対して家康もついに臣従を決意し、秀吉に面会して臣下の礼をとりました。

さて、天下統一を目指して大名を次々と従えた秀吉でしたが、彼の元々の身分が低いこともあって、武家の棟梁(とうりょう)たる征夷大將軍に就任することは不可能でした。そのため、秀吉は皇室との縁を深めることで、天皇の名のもとに天下に号令しようと考えました。

1585年、秀吉は朝廷から関白(かんぱく)に任じられ、四国の長宗我部元親(ちょうそかべもとちか)を降伏させました。翌1586年には朝廷から新たに「豊臣」の姓を賜(たまわ)り、太政大臣に就任しました。

関白や太政大臣となったことで、自身が朝廷から全国の支配権を委ねられたと見なした秀吉は、1585年に諸国の大名に交戦停止を命じた惣無事令(そうぶじれい)を出し、これに違反したとして、1587年に九州の島津義久(しまづよしひさ)を降伏させました。

そして1590年、秀吉は小田原の北条氏政(ほうじょうじまさ)を滅ぼし、伊達政宗(だてまさむね)らの東北の諸大名を降伏させたことで、ついに天下統一の事業を完成させたのでした。

2. 太閤検地と刀狩 ~巧みな内政の背後に軍事力あり

信長と同様に、秀吉もその豊富な経済力によって内政の基盤を固めていきましたが、その中で特に後世にまで大きな影響を与えたものに検地と刀狩(かたながり)がありました。

1582年の山崎の合戦以降、秀吉は新しく獲得した領地に次々と検地を行い、やがて全国的な規模にまで広がっていきました。これら一連の検地を太閤検地、または天正(てんしょう)の石直(こくなお)しといっています。

太閤検地において、秀吉は土地の面積表示を新しい基準のもとに定めた町(ちょう)・段(たん)・畝(せ)・歩(ぶ)に統一するとともに、それまではバラバラであった柵(ます、体積を図る測定器のこと)も京柵(きょうます)に統一して、全国の村ごとに田畑や屋敷地の面積や等級を調査しました。

太閤検地によって土地の生産力は、それまでの課税額で示していた貫高(かんだか)にかわって米に換算した石高(こくだか)で表示されるようになりました。これを石高制といっています。

また、検地帳には実際の耕作者の田畑や屋敷地が石高で表記され、それに応じて年貢と労役が課せられるようになりました。これを一地一作人(いちちいっさくにん)の原則といっています。この原則によって、一つの土地に何人もの権利が重なり合っていたのが整理され、その結果として長く続いた荘園

(しょうえん)制度は完全に消滅しました。

なお、太閤検地によって、農民は自分の田畑の所有権を法的に認められるようになりましたが、その一方で、自己のすべての土地財産を大名などに知られることで、年貢の負担も厳しくなっていました。天下統一が進んでいるとはいえ、いまだ戦国時代が続いているのですから、農民による抵抗があってもおかしくないはずなのですが、実際にはどうだったのでしょうか。

1588年、秀吉は刀狩令を出し、全国の農民から武器を取り上げて兵士との身分の違いを明確にするとともに、一揆を防止して検地を行いやすくするようにしました。

要するに、安心して検地を行えるようにするために農民から武器を取り上げたわけですが、そうであっても、支配者の武力が弱ければ、足元を見た農民たちは抵抗を続けたことでしょう。秀吉のように天下を統一して、それこそ数十万の兵力を持つようになったことで、初めて農民も抵抗をあきらめて、検地や刀狩に黙って従ったのです。

ところで、国内の統一が進むにつれて、海外との南蛮(なんばん)貿易も盛んとなり、豪商や西日本の大名らはこぞって海外へと進出していきましたが、秀吉も貿易での莫大(ばくだい)な利益を目指して貿易に積極的に乗り出し、1588年に海賊取締令(かいぞくとりしまりれい)を出して倭寇(わこう)を取り締まることで海上における支配を強化し、京都・堺・長崎・博多などの商人を援助して、貿易の保護と促進をはかりました。

当時の我が国は銀の産出が豊富であり、秀吉はこれらの天然資源を活かして東アジアの諸国と積極的に貿易を行いました。また、この頃には中国を支配していた明(みん)の国力が衰えており、世界情勢の変化を見抜いた秀吉は、我が国を中心とする東アジアの新しい秩序をつくることを視野に入れ、高山国(こうざんこく、現在の台湾)やゴアのポルトガル政庁、マニラのイスパニア(=スペイン)政庁などに服属と朝貢を求めました。

しかし、明の衰退に対して新秩序を構築していたのは秀吉だけではありませんでした。全国統一によって数十万の兵力や鉄砲による強大な火薬力を誇っていた我が国でしたが、その力を国内防衛のために使用するのか、あるいは攻められる前に先制攻撃を行うのか。遠く西洋の巨大な王国との抜き差しならない戦いが、秀吉の目の前に迫りつつありました。

3. 秀吉の外交政策 ～「やられる前に、やれ」

南蛮貿易は確かに大きな利益を生み出しましたが、時を同じくして我が国に急速に広まっていった宗教が存在しました。言わずと知れたキリスト教(=カトリック)のことです。宗教改革からの巻き返しを図るため、ヨーロッパ以外の各地での布教を目指したカトリックは、世界中を航海して各地の大陸の征服を実現しつつあるイスパニアとの利害が一致したことで、あたかもワンセットのように侵略を進めていました。

信長が貿易の権益を求めてカトリックを保護した後、秀吉も当初はカトリックの布教を認めていま

したが、そんな彼が、やがてカトリックに潜むイスパニアによる世界侵略の野望に気づく日がやって来たのでした。

1587年、島津氏を倒すために九州平定に乗り込んだ秀吉を、カトリックのイエズス会の宣教師が当時の我が国に存在しない最新鋭の軍艦を準備して出迎えました。その壮大さに驚いた秀吉は、イエズス会による布教活動には、我が国への侵略が秘められているのではないかとの疑念を持ち始めました。

そして、現地を視察した秀吉が、彼に待ち受けていた「3つの信じられない出来事」を目にしたことによって、疑念が確信へと大きく変化したのです。

秀吉が九州に上陸してまず驚いたことは、外国への玄関口でもある重要な港町の長崎が、キリシタン大名であった大村純忠(おおむらすみただ)によってイエズス会に寄進(=神社や寺院などの施設に金銭や物品を寄付すること)されてしまっていたことでした。

いかに信仰のためとはいえ、我が国古来の領地を外国の所有に任せるという行為は、自身による天下統一を目指した秀吉にとっては有り得ないことであると同時に、イエズス会やその裏に存在したイスパニアの領土的野心に嫌でも気づかされることになりました。

次に秀吉を待ち受けていたのは、キリシタン大名の領内において無数の神社や寺が焼かれていたという現実でした。これらはカトリックの由来であるキリスト教が一神教であり、キリスト以外の神の存在を認めなかったことによって起きた悲劇でもありましたが、秀吉の目には、我が国の伝統や文化を破壊する許せない行動としか映りませんでした。

さらに秀吉を驚かせたのが、ポルトガルの商人が多数の日本人を奴隷(どれい)として強制連行していた事実でした。支配地の有色人種を奴隷扱いするのは、白人にとっては当然の行為であっても、天下統一を目指すことによって、国民の生命や財産を守る義務があると自覚していた秀吉には、絶対に認められない行為でした。

イエズス会とイスパニアによる我が国侵略の野望に気づいた秀吉は、これらの事実に激怒するとともに、直ちに宣教師追放令(=バテレン追放令)を出してカトリックの信仰を禁止し、長崎もイエズス会から没収して秀吉の直轄地(ちよっかつち)としました。しかし、秀吉は権益もあつて南蛮貿易そのものを禁止することはできず、結果として禁教政策は不徹底に終わり、カトリックはその後も広まっていきました。

なお、1596年にイスパニアの商船が土佐(現在の高知県)に漂着した際に、乗組員が「イスパニアは領土征服の第一歩として宣教師を送り込んでいる」ことを、世界地図を示して誇ったという出来事があり(これをサン=フェリペ号事件といいます)、激怒した秀吉が京都の宣教師と信徒を捕えて長崎で処刑するという結果につながりました(これを「26聖人殉教」といいます)。

さて、秀吉が気づいたイスパニアによる我が国侵略の野望ですが、実際にイスパニアやイエズス会

はどう動いたのでしょうか。当時の我が国は、合計で数十万の兵力や、数を同じくする鉄砲による強大な火薬力を持っていたこともあり、イスパニアは、直ちに我が国を侵略することは現実的には難しいと考えていました。

そこで、イスパニアは勢力の衰えていた明に着目し、我が国での布教に成功したキリシタン大名を利用して彼らの兵力で明を征服すれば、返す刀で我が国を攻めることで侵略も可能になる、と考えました。つまり、明がイスパニアによって滅ぼされれば、次は我が国が確実に狙われるということなのです。

この構図は、鎌倉時代に起きた元寇(げんこう)そのものでもあり、イスパニアの動きをつかんでいた秀吉にとっても気が気ではありませんでした。明がイスパニアによって征服されるのを黙って見ているわけにはいかないとすれば、秀吉にはどのような策があるのでしょうか。

我が国への侵略の前提として明を攻めようとしたイスパニアでしたが、中国大陸へ直接攻め込めるだけの大きな軍艦は所有していたものの、それこそ地球の裏側まで多数の兵を連れて行くことができず、キリシタン大名の兵力を借りなければならぬと考えるほどの兵力不足でした。一方の我が国ですが、兵力や鉄砲による火薬力こそは充実していましたが、外航用の大きな船を建造するだけの能力が当時はありませんでした。

これらの点に着目した秀吉は、イスパニアと我が国とが同盟を結んで両国が共同して明を征服し、戦後は明国内でのカトリックの布教を許す代わりに、イスパニア所有の外航用の軍艦を売却してもらうという条件を示すことによって、外交によるイスパニアとの妥協を目指しましたが、武力による我が国の侵略を断念していなかったイスパニアに拒否されてしまいました。

進退窮(きわ)まった秀吉は、自分自身がイスパニアよりも先に明を征服してしまう以外に、我が国が侵略から免れる方法はないと覚悟を決めました。まさに「やられる前に、やれ」。先述した数十万の兵力や鉄砲による強大な火薬力を投入すれば、我が国単独での中国大陸の征服も不可能ではないと考えたのです。

秀吉のこうした決断は、天下が統一されたことで今後の領土獲得の機会を失い、力を持て余していた兵士たちに好意的に迎えられました。

古代マケドニアのアレクサンドロス大王や、モンゴルの英雄チンギス=ハーンがかつて挑んだ、巨大な兵力を持つ人間が当然のように行う遠征という名の道を、彼らと同じように秀吉も歩み始めたのでした。

自ら計画した明の征服に対して「唐入(からいり)」と名付けた秀吉でしたが、先述したように我が国は明へ直接攻め込むことが可能な大きな船の建造能力が当時はありませんでした。だとすれば、我が国と地理的に近い朝鮮半島を経由して攻め込む以外に方法がありません。

秀吉は対馬(つしま)の宗氏(そうし)を通じて当時の朝鮮半島を支配していた李氏朝鮮(りしちょうせん)に対

して「我が国が明へ軍隊を送るから協力してほしい」と使者を出しましたが、立場上は明を宗主国と仰いでいた李氏朝鮮は、秀吉の要請を拒否しました。

このため、秀吉は明を征服する前提として、やむなく朝鮮半島から攻め込んでいったのです。これこそが、1592年に起きた一回目の朝鮮出兵である、文禄(ぶんろく)の役(えき)の本当の理由でした。

肥前(現在の佐賀県)の名護屋(なごや)に本陣が置かれた日本軍は、加藤清正(かとうきよまさ)らが率いる15万の大軍で朝鮮半島に上陸して、当初は優位に戦いを進めましたが、李氏朝鮮の李舜臣(りしゆんしん、イ・スンシン)の活躍があったり、縦に伸びきった我が国の軍勢の補給路が断たれたことで、多くの兵が飢えや寒さに苦しんだりするなど、戦局は次第に我が国にとって不利な状況となり、やがて休戦となりました。

その後、我が国と李氏朝鮮や明との間で和平交渉が行われましたが、1596年に我が国に使者を送った明が「秀吉を日本国王に封ずる」という、一方的な内容の国書を送り返したこともあり、失敗に終わりました。

翌1597年に秀吉は再び朝鮮半島を攻めました。これを慶長(けいちょう)の役といますが、日本軍は当初から苦戦を強いられました。その後、1598年に秀吉が亡くなったことで休戦となり、我が国は朝鮮半島から撤退しました。

秀吉の二度にわたる朝鮮出兵は、当初の「唐入り」の目的を果たせなかったばかりか、朝鮮半島へ多大な影響を及ぼしたのみならず、我が国にも豊臣家を始めとして多数の損害をもたらした結果となってしまったのです。

4. 朝鮮出兵の真実と豊臣家のその後

ところで、秀吉の出兵によって大きな被害を受けた朝鮮半島の人々の恨みは今もなお深く、文禄の役は壬辰倭乱(じんしんわらん、イムジンウエラン)、慶長の役は丁酉倭乱(ていゆうわらん、チョンユウエラン)と呼ばれるなど、秀吉はまさに悪魔のような人物とみなされているのが現実です。

加えて、秀吉は最近の国内の歴史学説においても「理解不能な最大の愚行」「晩年の秀吉が正常な感覚を失ったことによる妄想」などといった散々な扱いを受けており、さらには多くの歴史教科書で、彼の行為を「朝鮮侵略」と断じています。

しかしながら、秀吉が朝鮮半島へ攻め込んだ本当の理由は、イスパニアへの対抗として明を先制攻撃しようと計画した際、その通り道となることを李氏朝鮮が拒否したからであるということをお忘れたいけません。可能性の有無はともかくとして、仮に朝鮮が我が国の「唐入り」に協力していれば、秀吉から攻められることはなかったでしょう。

秀吉の最終目標はあくまで「明の征服」であり、朝鮮半島そのものを侵略するという意図はなかったといえます。それなのに、秀吉の行為を「朝鮮侵略」と一方的に断定することは、秀吉の真意を

見誤るのみならず、歴史的にも正しい表現とはいえません。

従って、ここはやはり「朝鮮出兵」と表記すべきなのです。

また、秀吉に対する評価についても、朝鮮半島の人々の思いを受け止める一方で、世界史の原則である「ある民族にとっての英雄は、他民族にとっての虐殺者（＝戦争勝利者）である」という視点からも眺(なが)める必要があるのではないのでしょうか。

朝鮮半島の人々から見れば、秀吉は確かに許されざる侵略者ではありますが、その一方で、我が国にとっては天下統一を果たした英雄であり、戦国時代を終わらせて世の中に平和をもたらすきっかけをつくってくれた恩人でもあります。

秀吉と同じように海外に遠征したアレクサンドロス大王やチンギス=ハーンにしても、英雄としての顔を持つ一方で、彼らによって虐殺されたり、滅ぼされたりした民族が大勢いるという現実を考えれば、我が国に関わらず、違う国同士で共通した歴史認識を持つということが、どう考えても不可能ではないかという思いがします。

だからといって、その国にはその国で語り継ぐべき歴史が存在する以上、他国の歴史認識を一方的に間違いと決め付けることは難しいですが、逆に言えば、我が国が他国に対して、ある意味へりくだってまで他国の歴史認識に合わせる必要もない、ということにつながるのではないのでしょうか。

秀吉による朝鮮出兵に限らず、私たちは日本人なので、他国の感情には理解を示しつつも、我が国の立場で堂々と歴史認識を持てばよいのであり、我が国の公教育においても当然そのような歴史を伝えていかなければならないでしょう。

ところで、秀吉による朝鮮出兵は失敗に終わりましたが、だとすれば待っていましたとばかりにイスパニアが我が国との戦いで体力の弱った明を攻め込みそうなものですよね。しかし、現実にはイスパニアが明を侵略することはありませんでした。なぜでしょうか。

それは、秀吉が死亡した頃までに、イスパニアの勢力が衰えを見せ始めていたからなのです。

秀吉が死亡した1598年にさかのぼること10年前の1588年、イスパニアの無敵艦隊がイギリスとのアルマダの海戦で敗北しました。この戦いは、イスパニアとイギリスとの勢力が逆転するきっかけとなり、これ以降のイスパニアは、東洋に軍事力を割(さ)く余裕がなくなってしまったのです。

もしイスパニアがアルマダの海戦に勝利していれば、明の征服も成功していたかもしれません。そうなれば、我が国の運命がどうなったのか見当もつきませんが、間違いなく断言できることは、アルマダの海戦の結果が、遠く我が国にも大きな影響を及ぼしたということです。

また、明は秀吉の出兵から約半世紀後の1644年に、満州の女真族(じょしんぞく)のヌルハチによって滅ぼされ、新たに清(しん)が誕生するわけですが、清が建国できた原因の一つに、明が我が国と戦っ

たことで勢力が低下していたという事情があったことは間違いありません。

これらの事実を知れば知るほど、世界の歴史にも大きな流れがあり、それが我が国における歴史にすべてつながっていることがよく理解できますね。秀吉による朝鮮への出兵も、こういった世界史のレベルから見るべきだと私は思います。

さて、朝鮮出兵の失敗は結果として豊臣家による支配に大きな悪影響を与えましたが、それに加えて豊臣家には「後継者の不在」という致命的な欠陥がありました。

秀吉の正妻のおね(後の北政所=きたのまんどころ)の間には子がなく、甥(おい)の秀次(ひでつぐ)を後継者に指定して関白の地位を譲りましたが、1593年に側室の淀殿(よどどの)が秀頼(ひでより)を生むと、実子に跡を継がせたいと思うようになった秀吉は、次第に秀次を遠ざけるようになりました。

そして1595年、秀吉から謀反(むほん)の疑いをかけられた秀次は高野山に入って出家しましたが、その後に切腹を命じられ、また秀次の女子供を含む一族郎党の39人が京都で処刑されました。

それまでの「人たらし」としての面影が微塵(みじん)も感じられない、秀吉による冷酷な行動は、我が子可愛さからきたものであると同時に、独裁者となったことで、彼の猜疑心(さいぎしん、相手の行為などを疑ったりねたんだりする気持ちのこと)が強くなったことが理由であるとされています。

確かに秀吉の行為は、同じく独裁者となった信長の晩年と共通するところが見受けられますが、いずれに、秀次一族の虐殺が、実は豊臣家のその後の運命を決定づけてしまったのです。

そもそも、秀次に謀反の意図が仮にあったとしても、一度出家した者に対して切腹を要求するという行為は、当時としても考えられないことでしたし、また、一族郎党を公開のうえ処刑したことは、いかに戦国時代の風習が残っていたとはいえ、あまりにも「やり過ぎ」でした。

加えて、秀次やその一族を処刑したことは、数少ない豊臣家の親族をさらに弱める結果となり、いかに実子の秀頼が存在するとはいえ、成人した親族が一人もいなくなったことが、豊臣家の将来に暗い影を落とすことになりました。

秀吉は1598年に病気のため死の床に就(つ)きましたが、彼の実子である秀頼はまだ6歳と幼少だったこともあり、家康などに秀頼の行末(ゆくすえ)を依頼する直筆の書状が残されています。

間もなく秀吉は「露(つゆ)と落ち 露と消えにし わが身かな 浪速のことは 夢のまた夢」という辞世を残して62歳でこの世を去りましたが、秀頼と豊臣家の将来を託された際に、笑顔で応えた家康は内心でこう思っていました。

「太閤殿、貴殿が織田家に対してそうなさったように、今度は自分が豊臣家を出し抜いて天下を取る番ですな」。

秀吉の死からわずか2年後の1600年に起きた関ヶ原の戦いを経て、徳川家による江戸幕府が我が国を支配する一方で、豊臣家は1614年から1615年にかけての大坂の役で滅亡しました。

なお、いわゆる秀次事件に巻き込まれて秀吉の不興(ふきょう)を買った多くの大名が、関ヶ原の戦いで家康率いる東軍に所属しており、我が子可愛さが余っての秀吉による残酷な行為が、結果としてその後の豊臣家にとって逆らえない落日をもたらしたともいえそうです。

さて、その後約260年間続いた、江戸時代における豊臣家の扱いは不遇極まりないものでしたが、明治維新を迎えると名誉を回復し、京都や大阪など各地に豊国神社(とよくにじんじや、または「ほうこくじんじや」)が創建されるとともに、当時の大阪市長が昭和天皇の御即位記念事業として民間からの寄付を募ったことにより、昭和6(1931)年には大阪城の天守閣も再建されました。

晩年の朝鮮出兵の失敗がやや印象を悪くしているものの、乱れに乱れた天下を統一し、最終的には関白にまで出世した豊臣秀吉の一生は、その破天荒(はてんこう、今まで誰もしたことのないことをすること)ぶりが著しいですね。

外国の評価を気にすることもなければ、国内における謂(いわ)れなき批判に耳を傾ける必要もありません。私たちは日本人として、低い身分から関白へと「日本一出世をした男」の英雄譚(えいゆうたん)を、今後も堂々と子孫に伝え広めるべきではないでしょうか。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 11 戦国乱世編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379681>

YouTube 再生リスト「朝鮮出兵の真意」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4IEUHxz3siuphGEyEwHr1n>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>